

書 評

小松和彦他編  
『神話とメディア』

岩波講座 文化人類学 第10巻  
東京, 岩波書店, 1997年  
269頁, 3200円+税

梅屋 潔\*

本書はすでに出揃って概ね評価も定まりつつある「岩波講座文化人類学」の第10巻である。同巻はすでに在庫切れで、再版予定も今のところないことを付け加えておく。表題のとおり「神話」を扱った本書は、「儀礼」を扱った第9巻、宗教研究の可能性を現代的な脈絡の上で見出そうとする第11巻とともに人類学的宗教研究3部作とみるのが自然であるが(杉本1999:513)、ここでは一論文集として扱う。「序 物語る行為をめぐる—「歴史」から「神話」へ—(小松和彦)を別にすると本文は4部に分かれ、9本の論文が収められているが、本書の「序」は収録論文の解説にとどまらず、かなり紙数を割いて独自の議論を展開しているの、実質上10本の論文によって構成されている。「序」の末尾に「出来事・記憶・歴史」というテーマで準備した論文を「序」に組みこんだ旨が記載されている(p.40)。

序 物語る行為をめぐる

—「歴史」から「神話」へ— (小松和彦)

第一部 神話と構造

1 始源論と終末論 (宇野公一郎)

2 見出された潜在的な神話と構造主義

—「神話的論理」から「野生の思考」へ—  
(出口顕)

3 神話と権力 (竹沢尚一郎)

第二部 神話と言葉

4 俗信のしくみ (板橋作美)

5 文字という文化 (中村雄祐)

第三部 神話と表象

6 ワヘイの音・身体・記憶 (山田陽一)

7 うたうこと・かたること (卜田隆嗣)

8 境界を侵犯する動物

—特に、図像と物語を中心として—

(阿久津昌三)

第四部 神話と生成

9 透視と念写

—明治末期の千里眼新聞報道に見る「神話」表象— (関一敏)

小松論文によれば、本書は「神話ないしそれに類する物語とその伝達媒体に関する論考」(p.3)を集めたものである。実際に、これら諸論文はそれぞれ独自の立場から「神話」研究の現代的可能性に取り組んでいる、あるいは取り組もうとしている。いくつかの論文で同じ著者の既発表論文の参照が求められているのは、講座という出版形式の制約であろうか。神話を地のまま題目に盛り込んでいるのは竹沢論文のみであり、そのほかはすべて括弧つきになっている。この括弧は「いわゆる」という意味であろうか。対して四部とも表題は「神話と〜」という体裁をとっている。本書のもうひとつのトピックであるはずの「メディア」は、それぞれの表題から見出すことはできない。スタンダードや正伝と呼べるようなものは存在せず、それぞれが独自のやりかたでそれぞれのテーマについて論じている。部分が全体の反映であるとすれば、これが、本書のひいては神話研究の現在の状況の反映であるといえそうだ。「序」を兼ねた小松論文には本書の取りまとめの役割もあるのでひとまずおくと、構成に沿って概観してゆきたい。

第一部「神話と構造」宇野論文は、「神話の死」すなわち歴史的正当化のために未来に焦点をあてて再利用された始源論と終末論をレヴィ=ストロースの議論を詳しく追った後に紹介している。やや冗長な前置きとなったレヴィ=ストロースの議論は以下のように要約されよう。神話的言説を

\* 一橋大学大学院・マケレレ社会調査研究所

その時間的特性によって定義する (p.49) と、可逆的なラング的時間や不可逆的なパロルの時間とも異なって、過去のある時点で起こる出来事に常に関わりつつ、過去・現在・未来に同時に関わる恒常的な構造をもっている。すなわち第三の時間体系によって定義されているのである。この歴史的かつ非歴史的な二重構造をもつ神話の諸異伝と出来事を語る物語は、話の流れに沿って通時的に並んでいるが、出て来る順序にかかわらず共時的な関係の束の中で意味を作り出す。これらの諸異伝は、互いに対して対称的であるが、逆転した置換群に変換が可能である。この無意識的思考のレベルに築かれる変換の構造は、必然的に彼の考える人類の進歩からも通時的配列の優位性を剥奪する (pp.50-4)。つまり、歴史を一面的な不可逆反応とは見ずに、よく知られた「熱い社会」あるいは「歴史優先モデル」(「新石器時代モデル」)と「冷たい社会」または「構造優先モデル」(「旧石器時代モデル」)に代表されるように歴史への対応のタイプを指定する。また通時的連鎖も、可逆・不可逆の二つのタイプとして識別した上で、前者について不可逆的連鎖をもつ通時的連鎖が認められた場合ですら、構造そのものは消滅しても、構造の形式は残るとする (pp.54-8)。さらには独自の特徴が判別できないまでに変容した場合、小説的な練成に進むか、歴史的正当化のために再利用され、歴史的イデオロギーとなるのである (pp.58-64)。それを彼は「神話の死」と呼び、伝統的な秩序を過去に遡るために再利用される場合と、未来の糸口として過去を再利用する場合があるとした (pp.59-60)。

このような死んだ「神話」を再利用する際、未来が主導権を握る例として宇野氏があげるのは、元・明との戦いから数世紀後に、植民地的状況のもとで国を建て直すために朝鮮が檀君・箕子の神話を、ベトナムが龍僊の子孫であるという始源論的神話を、政治的イデオロギーとして再利用した例である。これらの「新しい始まり」のために「始まり」に遡った例では、始源は作られるべき未来の隠喩であるが、カーゴ・カルトやゴースト・ダンスは、過去を喚起して現在に反対表明し、

「始まりの時」の回復をめざすものとしてあげられている。あげられた例のうちでも、朝鮮とベトナムの事例が評者には個人的に大変興味深く、もっと詳細な記述がほしいところである。レヴィ＝ストロースの議論の要約が丹念なのにくらべるとことさらあっさりしているように映る。

続く出口論文は、レヴィ＝ストロースとターナーの有名な論争 (ンデンプではわずかな神話しかないでレヴィ＝ストロース流の構造分析はまず不可能で、儀礼の評釈から象徴分析するしかない。さらに構造分析には儀礼の重要な要素である感情を分析する視野に欠けているとする批判) から説き起こし、儀礼論者が見落としているという潜在的な神話に焦点をあててゆく。ターナーのレヴィ＝ストロース批判にもかかわらず、感情に対する知性の先行性は、儀礼の評釈に頼ることでターナー自身が密かに認めるところである。しかもターナーが儀礼の一部と考えて神話の範囲から除外し、レヴィ＝ストロース批判の根拠とした儀礼の評釈は、潜在的な神話にはかならないという。潜在的な神話に対して構造分析は、近隣社会の類似する神話や関連する顕在的神話と関連付けることで (単に差異を指示するだけの場合もあるとはいえ) 閉ざされている訳ではないと説く。この視点から見ると、「ご先祖様のしきたり」も潜在的な神話ととらえるべきである。いくつかの要素を含む起源神話 (パロパレ型として言及) は歴史が偶発性をもって入り込んでくるが、儀礼の未来のあり方には沈黙しているのに対し、「ご先祖様の教え」的な潜在的な神話 (クランコ型) は、いかなるものも特権的に排除することはない。言いかえると気づかれないうちに伝統が刷新されることを許し、無数の偶発的出来事を潜在的レベルにとどめておくパラダイムという神話の極限状態である。レヴィ＝ストロースは、パラダイム的 (範的) 分析を行うことで排除・選別を避ける可能性を試みていると本論文は主張する。

竹沢論文では、マリ共和国のジャという都市のリニージの伝承を王の伝承と対照することで王権の政治的装置としてだけではなく文化的装置としての側面を記述する。最古のリニージであるトモ

タとクワンタの歴史伝承を対比すると、「穴に住んでいた」土着の住人と「よそから来た」人々が「血の契約」を結んで連帯し、「馬の頭で耕していた」人々が道具を獲得して村の制度を整備するなどの共通のモチーフがみられる。これはリネージ同士の権利義務関係の自己意識をあらわしている。王権が成立してからやってきたシネンタやコンタのようリネージはまず王権と対立し、のちに和解する構図をとっている。これらは王によってアイデンティティを支配の体系に沿ったものに変えさせられている。それに対して王自身ではなく王の語り部によって語られる王についての伝承(ジャワラの伝承)は、王が「馬に乗り、奴隷を連れ、槍と金の耳輪をもって」外部からやってきたこと、さらには外部者を取り込んだ権力の求心構造が豊かに語られている。この意味ではひとたび王権が成立したとき自己意識をもちうるのは王のみである。王は自ら語るものではなく常に王にとっては利用か破壊されるべき<他者>によって非対称的に語られるものであることが明らかにされる。同じ著者の既発表論文より、テーマが絞られているためかずいぶんとわかりやすく読めた(竹沢 1992: 85-133)。

第二部「神話と言葉」板橋論文は、「ここで扱うのは神話ではない」(p.127)とし、「卑俗で浅薄な知識、お説教のたぐいでしかない」(p.127)「俗信」を取り上げる。日本各地の報告にもとづいて俗信を独立項とみなして口承文化としてのしくみやからくりを明らかにする。神話と違いごく普通の人々によって日常的に頻繁に話されるものであるため、俗信は改竄、捏造、記憶違い、言いまちがいの「変形」の「危険」(p.128)にさらされている。評者には以上の記述は違和感があるし、先に引用したような本論文における俗信の扱いは、議論の余地があるように思われる。上記の板橋氏の議論を理解するには最近著(板橋 1998)をあわせ読む必要があるようだ。ところで、板橋氏によると俗信は一様性と多様性をもっているという。基本的にはほとんど変わらないが、要素の一部が異なる事例が多い。それを同一構造の異なる表現形であるとみなし、豊富な事例を検討する。個別

な事例をここで検討する余裕はないし、板橋氏の意図のひとつは、断片的で非体系的といえども軽視すべきでないということだと推察されるが、板橋氏もいうように、最近の民俗学では俗信を「偏見にみちた先入観」でみているものはあまりないように見受けられる。

中村論文は、「メディア」としての文字文化のひろがり人類史のなかで位置付けたうえで、文字文化の歴史を西ヨーロッパとサハラ以南アフリカについて記述したものである。多様性と変異性を維持しながら技術的な発展とともに社会状況も手伝って普及してゆくさまを追ってゆくと淡々とした記述から人間が文字文化にむしろ追い詰められてゆくような不気味な印象さえ覚えるのは評者だけであろうか。ユネスコや世界銀行の資料を豊富に用いて手堅く解説する論旨を前にすると異論をはさむことが無意味に感じる。探してみたが「神話」という文字は本論中には見当たらなかったようである。

第三部「神話と表象」では、山田論文は、ワヘイの音と身体と記憶を現地の概念から丹念に拾いおこしている。平行な川岸に流れる水のイメージを喚起するコスコス、川面に飛び出した流木のせいでいったん別れ、後に合流する水の流れをあらわすセディオセディオ、水路が本流に流れ込んだり流れ出したりするさまをあらわすハホネタなどの動態的隠喩が、ソングカグ(ひじ)、ヨゴック(のど)といった身体部位を媒介としてつなぎ合わされている。鰐に似て非なる「霊の中の霊」グハを含むウィンディオコムという神話とつながった音楽にみるように身体感覚として表現される。それは身体をなかだちとして記憶に揺さぶりをかける。そうした意味で身体は音と記憶をつなぐメディアであるという。つづくト田論文とともに現地の観念から分析をはじめている姿勢は評者も見習いたい。

ト田論文は、うたやかたりにあらわれる借用語の意味について説得的に論じている。サラワクのブナン・ブラガのクニャ語を用いたかたりヤカリマンタンのブナン・ブナルイのインドネシア語による語り、独立国と植民地支配下といった歴史

的な経験を経て形成されたレベルは違うがかなり共通項の多い交渉であることを明らかにしている。これらはカミヤクニヤなど他者に対する感謝と不満を表明するごまかしを含んだコミュニケーションである。うたは身体の共振によってささえられているという点には続く議論が期待される。

阿久津論文は、西アフリカの動物分類を取り上げ、家の動物、森の動物、越境する動物の造形美術の中での扱いを非文字コミュニケーションの一形態として論じている。阿久津氏は「無文字社会では、送り手と受け手との関係性、「語り」という行為の共犯関係の深層構造の内にある異次元・異媒体間の変換という機能がきわめて重要な役割をはたしている」(p.246) という。引用だが、この個所が結論だとすれば評者にはいまひとつ意味がつかみかねる。構図そのものは、従来のものをほぼ踏襲しているといえる。ないものねだりだが、造形美術の中での形態や描かれ方についてもっと詳しい説明がほしい。

第四部「神話と生成」すなわち関論文は、明治期におきた「千里眼事件」を追うことで現代社会において「神話」が作られ、また腐れてゆく推移を新聞というメディアの豊富な資料を用いて解き明かしている。この事件にはさまざまな対立関係が認められる。「もの」と「ところ」つまり物理学と心理学という立場をめぐる対抗関係だけではなく、新しい光線や波の発見が期待される気運や透視能力の由来が動物の先祖がえりと重ねあわせてみなされる説などに、未来と太古の対抗関係もみられるという。この関論文と中村論文には、資料の山を机の上に積まれたような気になり、考えさせられた。

最後に序を兼ねる小松論文をみてみよう。いままでの諸論文が概ね神話研究の過去と現在にかかわっているのに対し、本論文は未来にも積極的にかわろうとしている。人類学的神話研究は周辺的な位置を占めてはいるが、それをとおして、それを伝える社会や文化の特徴を鮮明に浮かび上げらせ、人間を考える手がかりを与えてくれるものであるという (p.6)。分類のしかたにもボンナップにウルウォ (真実とされる話)、フィヨン (作

り話)があるように、社会ごとの基準がありうる。広く神話を含む物語といった場合、それは、語り手によって経験される出来事を連鎖させる装置であって、瞬間のみに生き説明されねばならない情報とは異なり、消耗されず説明から開放されている。それは、身体を媒介にして時間と空間の双方に作用する強制力を共有する (p.6-11)。ここで触れられる「物語」という用語の扱いはその濫用が問題視され、議論になったことがある (関本 1992, 清水 1993) が、ここでも分析用語としての「物語」と研究対象としての「物語」が並存している。評者もかねがねより中立性の高い分析用語の開発が望ましいと考えているのだが。ところで、神話の研究は、形態、内容、機能、コンテキストといった4つのレベルから接近することができる (pp.11-16)。またボンナップのマーサルとプールという2集団の氏族の歴史にみられるように、異なった「起源」の物語をもとに主観的「歴史」を再構成する機能もみられる (p.16-21)。しかしながら完全に客観的な「歴史」はありうるだろうか、程度の差ではないか、と小松氏は問う。川田順造がいうように、歴史は、ある地点から解釈されて再提示された表象であって過去の事実そのものではない。にもかかわらず近代歴史的叙述が特権的な地位にいるのは脱神話化の背後にひそむ「イデオロギー」の問題であるともいえる (pp.22-6)。さらに構造主義的神話研究の方法は、特定地域の専門家から脱却して文化史的な比較ともいべき研究に向けていまなお開かれていると説く。評者は俄かに小松氏の議論に賛成はできないが、小松氏の論旨を追ってゆくと複雑な思いに駆られる。「神話」研究の周辺性に嘆息し新たな展開を求める小松氏の勢いはそれこそ白熊を追うアスディワルさながら魅力的である。近年いくつも起こった人類学批判の影は、ここにはまったくない。しかしその展望を語るとき、アスディワルの携えているはずの魔法の道具に対応するのがコンピューターのデータベース (p.32) だとすれば、同じページで「貧しい神話」として言及している通時的連鎖というか近代歴史というか、そうした視点からの発想ではなかるうか。おそらくはそう

ではあるまい。小松氏は論文後半に本書所収論文の位置付けを行っているが、これほど多様な対象・方法・スタイルの論文を論旨のなかでまとめてゆく手腕にはいつもながら脱帽させられる。全体を概観してみると一見ばらばらにみえた諸論考が「神話と構造」「神話と言葉」「神話と表象」「神話と生成」といったキーワードで関係性がつむぎだされてくるように思われる。こうしたわざは、資料の量からただちに生まれる質のものではない。

冒頭に述べたように現在の神話研究にはそれにふさわしく正伝はない。一見ばらばらにみえる。そうした意味で神話研究は正しく「神話」らしい状況にあるようである。ところでアステイワルを天で待っていたものは何だったろうか。

#### 参照文献

板橋作美

1998 『俗信の論理』東京堂出版

清水展

1993 「物語論的理解のために一関本氏の書評に答えて」『民族学研究』57(4), pp.460-3

杉本良男

1999 書評「青木保他編『宗教の現代』」『民族学研究』63(4), pp.513-6

関本照夫

1992 書評「清水展著『文化のなかの政治—フィリピン「二月革命」の物語』」『民族学研究』57(2), pp.262-6

竹沢尚一郎

1992 『宗教という技法—物語論的アプローチ』頸草書房

梶原景昭他編

#### 『文化という課題』

岩波講座 文化人類学 第13巻

東京, 岩波書店, 1998年

248頁, 3200円+税

川田牧人

文化人類学の講座ものであるから、その最終巻には文化人類学者が課題とする文化をあつかうのが妥当だという理由で、この巻が配されているのではない。課題とすべき文化が自明視され得なくなり、それにともなって文化をお定まりの手続きで課題とすることも許されなくなるような状況が、本書には色濃く反映されている。序において説明されるのは、このような状況である。現代世界の「大きな問題」(地球大の、あるいは人類史上の、というべきか)において、文化の占める位置が重要性を増し、文化を固定的に、あるいは政治や経済という固定的な枠組みと並列させて別個に扱うことができなくなってきた。これらの各領域が統合される交錯点として文化を再認識する地点から、「大きな問題」に対処していくというのが、本書の目的である。これはたとえば、現代社会の諸問題が文化に収斂して噴出することから、むしろ文化を否定的に捉えようとする視点とは対照的である。現実認識としてはそれと近似する地点に立ちながら、本書では多難を承知の上で、文化という帆にまともに吹きつける逆風を受けて進もうというわけである。

この航行は決して無謀なものではない。マークスは「民族誌批判以降」と題する論文の中で、民族誌を再デザインするためには、空間・時間・声を問題視することが必要であると述べている(Marcus. J. After the Critique of Ethnography. in Borofski. R. (ed.) Assessing Cultural Anthropology. McGraw-Hill, 1994)。空間や時間(それらは民族誌が語られる「場」である)や声を固定的に捉え、「観察される」ものとして文化が対象化され規定